

第三部

天草島測量

第一章 天草下島測量

天草島測量事前打ち合わせのため、上田宜珍と中原新吾は、伊能忠敬が測量中の鹿児島・甕島に渡海して、忠敬と対面した。

その中で、天草側からも、伊能側からも、多くの質問があったことだろう。

そして、この時点で、伊能が得た知識は、天草は「存外大きな島」ということであつた。忠敬は、江戸に天草をこう伝えている。

「天草島の儀は存外の大島にて、大島は周回6、70里、中島30里余、小島5、6里を頭として、数多これあり候由、下甕島まで天草大庄屋まかり越し物語にござ候。左候わば、2か月を相掛り申すべきやに存じ奉り候。」

天草は、幕府にとって、どのような価値を持っていたのだろうか。徳川幕府も三代目政権になり、政情も安定してきた時期に、その幕府が驚愕するほどの百姓一揆（キシタン一揆とも）を起こした島であり、やむなく藩領としてではなく幕直轄支配とした。一時私領としたが、余りにも貧しい島であつたために、私領としての経営は成り立たないとの判断も働いたということだろう。

本来幕領は、全国各地に点在したが、それは幕府に利益をもたらす地を持っていた。しかし天草はその逆であつた。

幕府にとって、なんの利益をもたらさない天草を、やむを得ず幕領として抱えていたこともあり、時間ときの経過とともに、その支配体制の弛緩は抗しがたく、地元代官による直接支配は短く、島原藩に預けたり、現在でも遠い日田代官（郡代）に支配させたりと、その支配者の目まぐるしい交代は、結局天草が厄介ものであった事を物語っているといえよう。

ただし、キリシタン一揆から170年も過ぎた当時の天草は、ずいぶん発展をしていたことも確かである。しかし、11万人※を超える過剰な人口を抱えたり、相次ぐ天災と、貧しい島であることには変わりなかった。

さて、伊能忠敬の天草測量が成された時は、島原藩預かりの時であった。

島原藩としても、天草預かりは迷惑な上に、測量隊受け入れは、さらに厄介事だった。しかし、嫌とはいえぬお役目。村人と共に必死にお役目大事に励んだ島原藩役人にも、ここは敬意を表し、いざ天草測量の旅に、我々も測量隊の迷惑にならないようにして、同行しよう。

※寛政六年（1794）

郡中惣人高11万2千余なり（天草近代年譜）

文政十二年（1829）

総人数14万1529人なり（同）

第七次測量の概要

天草測量に入る前に、第七次測量の概要について見てみよう。

伊能忠敬測量隊は、文化六年八月二十七日（1809年10月6日）江戸を出発した。

忠敬は「測量日記」に、出発の様子を次のように記している。

八月二十七日 文化六己巳年八月蒙国々測量命。八月二十七日朝出立。此日曉七ツ後より小雨六ツ後止曇天。任先例我等、上田文助、箱田良助、黒田藤吉、棹取長蔵、草履取清七を供とし八幡宮へ参詣。直に六ツ半頃発足。上下九人、内弟子梁田栄蔵、上田文助、箱田良助、侍成田豊作、黒田藤吉、棹取平助、長蔵、草履取清七なり。

送別の人は伊能三郎右衛門、伊能繁蔵、同秀蔵、大川治兵衛、大野弥三郎五人なり。駒込大観音前にて与風坂部貞兵衛行逢、同道して青木勝治郎方へ立寄り一同になりて王子村に至る。

下河辺政五郎、永井要助、先へ着て待居る。都合上下十七人王子村茶屋扇子屋に出会。直に岩淵村（即駅）

迄測量の段村役人へ申談の所、荒川大洪水にて川留、且王子村より岩淵村の間行路水乗橋々落通行難成旨。王子村より岩淵村迄の村役人一同願に付王子村に止宿。扇子屋弥惣右衛門（此茶屋家作も広く庭に流水を用、風景好）。

後来る送別人は足立左内、下津藤蔵、相沢文五郎。一同に王子村止宿迄来る。粟生村飯高吉太郎遅来る。八ツ半頃より中晴。此夜測量。

このように、測量の旅の出発前の恒例となっている、隠宅（深川黒江町）近くの富岡八幡宮に参詣した後、送別の人に見送られ、631日に及ぶ、第七次測量に出発した。

王子（東京都北区王子）から岩槻（埼玉県さいたま市）迄^{*}の御成街道の測量から開始。熊谷（埼玉県熊谷市）、高崎（群馬県高崎市）、松井田（群馬県安中市）、諏訪（長野県諏訪市）、木曽福島（長野県木曽町）を経て、十月十七日（11月24日）に岐阜の加納に至る。近江・小篠原（滋賀県野洲市）で第五次の測量杭に繋いだ。

武佐（滋賀県近江八幡市）より東海道と中山道を結ぶ御代参街道を土山（滋賀県甲賀市）まで測り、その後は測量を行

わずに十一月五日（12月11日）に淀（京都府伏見区）に到着。
淀より、山崎街道[※]を西進、西宮（兵庫県西宮市）から山陽道に入り、豊前・小倉で越年。

小倉に14日間滞在したのち、九州測量を開始。中津、杵築、大分、臼杵、津久見と進む。海岸線が複雑なため日数がかかり、日向・延岡に着いたのは文化七年四月六日（1810年5月8日）である。

佐土原、日南、都城、都井岬、内の浦から大隅半島を鹿屋経由で横断し、西岸に出る。それより南下し半島を一周して六月二十三日（7月24日）鹿児島に着く。薩摩半島を南下し、山川湊から屋久島、種子島に渡る予定だったが、風が悪いので枕崎へ向かう。

薩摩半島を測量の後、串木野で手分けして、海岸線と街道筋を測って肥後に入る。ここで屋久島、種子島を断念し、天草を測ったのち、十二月二十八日（1811年1月22日）大分に着く。ここで越年。一月四日（2月7日）大分を發ち、中国、近畿、中部地方の主要街道を手分けして測量し、文化八年五月九日（6月28日）江戸に帰着した。

総日数631日。（行程図は写真ページ参照）

《註》御成街道^{おなりかいどう}は、將軍などが通るために整備された街道のことである。御成道^{おなりみち}とも。

御代参街道^{ごだいさんかいどう}は、江戸時代に近江国に整備された脇街道。東海道士山宿（現・甲賀市）から中山道小幡（現・東近江市）までの約36kmを結ぶ。東海道脇街道、北国越安土道、伊勢道、市道とも呼ばれる。春日局が1640年（寛永17年）に伊勢神宮から多賀大社へ参詣した際に整備されたと伝えられている。

山崎街道^{山崎街道}は、京都と下関間の西国街道（山陽道）のうち、京都と西宮間をいう。

(Wikipedia)

天草測量の行程概要

伊能測量は、2隊に分かれて行う場合と1隊で行う場合がある。1隊で行う場合も、先手、後手と2グループで行う場合が普通である。

天草測量に入る前は、伊能隊と坂部隊の2隊に分かれて実施してきた。伊能隊は、薩摩の西沿岸沿いを、坂部隊は薩摩から肥後人吉への内陸部を測量してきた。

伊能隊は、薩摩獅子島から天草に入り、坂部隊は葦北郡袋村（現水俣市）から、同じ大多尾村へ上陸した。伊能隊が天草に入ったのは、陰暦の九月十八日、坂部隊が2日遅れの九月二十日であった。全く別々のルートを辿り、しかも電話連絡も出来ない中での、至近日合流。見事なスケジュール管理である。

さて、天草測量の行程概要を示すと。なお地名は、現在地名で記す。但し市、郡名は省略した。

天草測量はまず伊能隊単独で行ったが、二十一日には合流し、新和町中田から山越えし、国道266号沿いの河浦町新合までを横切り測量した。

その後2グループで、新和町大多尾から東海岸を南下し、河浦町宮野河内、深海町、久玉町へと進む。さらに、牛深へ。その後今度は東海岸を北上し、魚貫町、二浦町、羊角湾沿いに一町田へ。一町田からは完全に2隊に分かれ、伊能隊は、海岸沿いに崎津、大江、高浜へと進む。坂部隊は一町田から山越えで天草町福連木へ、さらにまた山越えで都呂々へ。その後沿岸を南下し、天草町下田南まで。それから引き返し、苓北町富岡まで測量。

一方伊能隊は、高浜から下田南まで測量。その後富岡まで移動し、富岡で合流した。富岡を測量後、北岸を東進、

坂瀬川、五和町二江へ。二江からは、坂部隊は横切りで、手野、城河原、本町下河内へ。伊能隊は、海岸沿いに鬼池、御領、佐伊津町から本渡町内へ。本渡で合流し、楠浦町から測量始点の新和町大多尾で、天草下島の測量が終わる。

その後また2隊に分かれ、伊能隊は上島の南岸を東進。下浦町、栖本町、倉岳町、龍ヶ岳町、合津町へ。

坂部隊は、上島北岸を東進。志柿町、有明町、松島町、大矢野町を測量。ただ、大矢野町を測量後また上島に引き返し、有明町楠浦や松島町今泉を測量。

松島町合津で合流し、教良木、姫戸、そして御所浦島へ渡り、御所浦島で53日間の天草測量を終えた。

その後は、伊能隊は芦北町へ、坂部隊は八代へ渡海した。

詳細は、本文、資料の行程表、宿泊村を参照。

伊能測量隊、天草上陸

それでは、いよいよ天草測量が始まるが、まず開始一日前から見てみよう。薩摩の獅子島の測量を終え、当日は朝から天草に渡航の予定であったが、風雨烈しく昼になってやっと乗船、天草大多尾村へ渡海する。大多尾村では、今か今かと、天草支配を預かっている島原藩の役人を始め、招集された各組村々の大庄屋、庄屋連が待ち受けていた。

そして、やっと御用の旗を掲げた測量隊一行が、戦か
と見間違ふほどの僚船を伴い、大多尾へ上陸した。

そんな光景を想像しながら、簡潔で味気ない測量日記の
文章を膨らまして、我々も測量隊に同行する一員と仮定し
て、天草測量の旅に出発しよう。

測量開始1日前

10月16日（九月十八日）

泊地・大多尾村（天草市新和町）

《測》

朝より雨 10時過ぎ（四ツ後）まで降る 殊に風悪
く天草渡航を見合わせるが12時前（九ツ前）雨が止んだ
ので、12時過ぎ（九ツ後）より乗船。

肥後国天草郡、島原預かり御料所天草大多尾村へ16時
前（七ツ前）に到着する。

宿・庄屋武部利左衛門 別宿・百姓宇多治。

肥前国島原松平主殿頭家来 藤本恕助出迎。

（天草郡の大庄屋、庄屋出勤した人の書き写し）

高浜村庄屋

上田源作

津留村庄屋

蓑田文吉

小島子村庄屋

吉田慶右衛門

都呂々村庄屋

酒井平太兵衛

深海村庄屋

橋口嘉左衛門

今泉村庄屋

岡部九郎左衛門

大宮地村庄屋

園田佐和藏

小宮地村庄屋

歳田十右衛門

楠浦村庄屋

宗像三郎兵衛

棚底村庄屋

鬼塚元左衛門

中田村庄屋

大堂作右衛門

二江村庄屋

長島増太郎

町山口村庄屋

大谷小十郎

宮野河内村庄屋

池田伊三郎

下河内村庄屋

佐藤弥右衛門

浦村庄屋

小松彦右衛門

久玉組大庄屋

中原新吾

井手組大庄屋

長島安吉

栖本組大庄屋

小崎六郎左衛門

本戸組大庄屋

木山十兵衛

大矢野組大庄屋

吉田長平

砥岐組大庄屋

藤田左仲太

この日、薩州野元嘉兵治（嘉三次）、松本寿右衛門、

篠崎林右衛門、用聞深江伝左衛門、山口利右衛門、こ

こまで送り来て測船。

この夜曇り晴れ、天文測量

《巡》

曇天 北東の風

雨10時(巳刻)頃まで降りその後晴れ

- ①伊能勘解由様上下5人宿・大多尾村役座
 - ②下河辺政五郎様上下宿・宇太次宅
 - ③永井要助様上下宿・同
 - ④竿取1人宿・同所役座
- べ10人

沖間出迎え 吉田慶右衛門(小島子村庄屋)

岡部九郎左衛門(今泉村庄屋)

援船6人召し連れ

右人数、獅子島より渡海 15時(未下刻)頃大多尾へ

着船

薩州附添野元嘉三次殿べ3人その他役々見え、着船
を見届け直ちに帰帆する。

右の船は何れも村船である。

郡中大庄屋庄屋船場へ出迎え 人数は次の通り(後記)

獅子島より天草へ、朝から渡航を試みたが、風雨のため、

渡航を見合わせていた。昼になり雨風が止んだので、渡航を始めた。

約4時間かかって、大多尾に着く。大多尾には、島原藩天草代官の藤本恕助や多数の郡中村々の大庄屋、庄屋連が出迎えた。忠敬は、その出迎えの人の名を几帳面に記している。

薩摩測量に付添役としてずっと付き添ったとみられるのが野元嘉三次氏である。この野元氏はどういう身分だったのだろう。測量日記には差添(付廻り?)とあるのみで、この野元氏の身分について何も記していないので分からない。ただ、(『伊能忠敬測量隊』渡辺一郎編著)には、留守居添役となっている。また、「垂城録」という薩摩藩の記録には、御留守居付役となっている。どちらも同じ役職と思われる。(ネット かだいおうち)

この根元氏は、二度目の薩摩測量が行われないように、江戸に帰った忠敬を追いかけ、中止の交渉をしているともいう。ただ、忠敬にとっては、野元氏は好ましい性格だったようで、そのため測量日記にも、たびたび名前も登場しているのだろ。

野元氏からの忠敬への書状も三通残されている。

その中止を求めた理由は、①に他国や幕府役人を受け入

れない準鎖国政策と共に、財政難に喘いでいたからとも言われる。ただし、幕府に対するメンツもあり、結局はかなりの支援をしている。

出迎えの大庄屋庄屋等の名前は、宜珍の巡廻日記にも記載しているが、重複になるので省略するが、若干相違がある。

宜珍日記にあつて、忠敬の測量日記にない者

富岡町庄屋 荒木三左衛門

富岡町先庄屋 荒木市郎左衛門

鬼池村庄屋 池崎民助

忠敬測量日記にあつて、宜珍日記に無い者

浦村庄屋 小松彦右衛門

名前の一部に相違がある者。

○ 内は宜珍日記

小宮地村庄屋 歳田十（重）右衛門

砥岐組大庄屋 藤田左仲（中）太

宮野河内村庄屋 池田伊（伴）三郎

また、伊能日記には、明らかな間違いとして、砥岐組を砥波組、栖本組が柄本組、大矢野組は矢野組となっている。

薩摩藩領の獅子島から天草大多尾への渡船は、風雨のため時間を見合わせ、乗船したのが九ツ後、大多尾に着いたのは七ツ前。現在の時間に直すと、ほぼ4時間くらい掛かっているようだ。

現在は、中田港から獅子島の片側港まで、フェリーが通っているが、30分しかからない。ただ乗船したのは、やや遠くの幣串で、大多尾までの距離は倍近くあるが、それでも1時間で着く。この一事をもつても、昔の大変さがわかる。

《近》10月16日（九月十八日）

測量隊一行18人、この日未の刻、薩摩接待役野元嘉三次付き添いにて大多尾へ着船する。天草よりは付廻り役藤本恕助のほか、接待役中原新吾、吉田長平、上田源作（宜珍）、酒井平太兵衛、橋口喜左衛門の大庄屋、庄屋等これを出迎え、一同随伴して世話に万全を期し遺漏なきことを期す。

坂部の別動隊8人は、翌々日午の刻、葦北袋村より大多尾に上陸し、中田村で本体と合流する。

測量隊一行18人が大多尾へ着船とあるが、10人の間違い

と思われる。

測量隊一行は総員18名で出発したが、途中で2名が離隊して天草測量時は16人と思われるが、巡廻日記によると、伊能隊が10人、坂部隊が8人となっている。ただし、26日の坂部付き巡廻日記には、隊員の人名まで記してあるが、それによると16名である。

今日我々は、幕府直轄領であつた地を一般的に天領と言っているが、当時は御料所と言つていたことが分かる。当時の言葉はなかなかむつかしく、例えば將軍は上様であり、藩主は殿様であつたという。また、藩主以外で旗本なども殿様と呼ばれていたようだ。さらにこの殿様クラスになると、(名前を呼ぶのはタブーであつたかどうかは、理解していないが)、官位で呼ぶのが通常だつたようである。例えば、熊本藩主はほぼ歴代越中守を得ていたので、忠利(初代熊本藩主)様でなく、身内からは殿様、部外者からは越中様(越中守)と呼ばれていたようだ。

ちなみに余談ながら述べると、平成二十八年のNHKの大河ドラマ「真田丸」では、官位を得た真田信繁(幸村)などを名前でなく、官位で呼んでいたのは、評価できる。

伊能忠敬天草測量始まる

忠敬の測量隊一行は、豊前国の東海岸を南下し、大隅薩摩を測量して、いよいよ天草に渡ってきた。

測量隊は、忠敬を長として、手附手伝坂部貞兵衛、下役下河辺政五郎、永井要助等上下合計16名である。

10月16日、一行はいよいよ薩摩獅子島を発して、同日午後4時前に、天草下島大多尾村(現天草市新和町小宮地)に到着した。代官をはじめ付近の大小庄屋等25名が、この地に集合して出迎えた。

また坂部の率いる8名の別動隊は、肥後葦北郡袋村の測量を終え、10月18日大多尾村に到着し、同日中田村で本体と合流した。

こうしていよいよ、天草の測量が始まった。何といつても幕府御用の測量隊。受け入れる側は、下にも置かぬもてなしをしなければならない。その大変さが想像できる。

《近》10月17日(九月十九日)

一行の測量はいよいよこの日より西南方に進み、牛深に至りて北へ転じ、11月4日高浜、同9日富岡と目指し、さらに富岡より6日二江泊まりと東上し、亀川、瀬戸付近に於いて本隊、支隊に分かれて、東進。伊能

本隊は上島の南海岸を砥岐方面に進み、坂部支隊は上島北海岸より大矢野島を巡り、合津村にて合流する。

ただし、天草近代年譜では、この測量へこの後の詳細は、十一月十二日の測量終了まで記載がなく、53日間にも及ぶ忠敬一行の天草測量の実働についてはそつけない。

一行の迎えには、富岡役所から代官藤本恕助。郡からは上田宜珍をはじめとして、大庄屋、庄屋連25名が迎えた。大庄屋、庄屋の多くは下島であつたが、上島の大庄屋、庄屋も7名がおり、大多尾村から一番遠いのが、大矢野組大庄屋もいた。現在では、大矢野から大多尾の新和町までは車で1時間くらいだが、当時は船で通つたとしても、ずいぶんかかったことだろう。現に、長島獅子島から大多尾に渡るだけでも、4時間もかかっている。もちろんこの日は悪天という悪条件下ではあつたが。

迎える側として、大変だつたのは、御用に対して失策は許されないということもあるが、連絡手段が簡単に取れないということだろう。現在ならば、様々な連絡手段があり、一挙一足が手に取るように把握できるが、当時の通信手段は人が現地赶赴いて、その情報を持ち帰るほかはなく、大

変な労力と時間がかつた。

また、同じ天草郡であればまだしも、薩摩藩と幕領天草では国も違えば支配方式（藩と幕領）も違う。したがって日ごろの通信手段もなく、交流もない。それらの対処も大変だつたことが、容易に想像できる。それは、現代的に言うところ、外国と連絡する以上のものであつたろう。ただ、民間レベルでは、商船や漁船の往来は結構あつた様である。

そして、天気予報と云うものがなかつたこともある。つまりすぐそこまで台風が来ていても、それを知る術がなかつたし、当時は台風の意味さえ分からなかつた。台風でなくても、突然吹きだした風や降り出した大雨が、難儀であつた。しかも、現在のように身軽な防水衣服等もない時代。

しかし当時としては、それらは当然のことであり、現在のように一分一秒に神経をとがらすことはなかつた。

ただ、天草ののんびりした風土と違い、毎日毎日、必死で測量を続ける伊能測量隊は違つていた。天草だけではないだろうが、のんびりした風土とも闘わなければならぬことも多かつたに違いない。しかし、辺土天草と雖も、文化的には、中央と違いはそれほどなかった。それは、上田宜珍を見れば然り。

現在の我々が見ても、訳の分からない、文書や難解な漢



上:新和町龍頭山から見た獅子島

下:現在の大多尾港

この地に伊能測量隊上陸の碑が欲しいところだ



字・用語、単位を、エリート層の武士身分でない百姓が理解し活用していた事実。天草を文化果てる島とかいう表現も無きにしも非ずだが、天草でもかなり文化は高かったはずだ。この事実をもっと歴史的事実として、天草人として誇りに思うことも大事だと思う。

いよいよ天草測量へ

1日目 1810年10月17日

(文化七年九月十九日)

測地・大多尾村・小宮地村(天草市新和町)
泊地・大多尾村(天草市新和町)

《測》朝晴れ曇り 大多尾逗留

6時(六ツ後)過ぎ出発。

同所より始め、大多尾村下大多尾、小宮地村、潟内、北高根、立、丸瀬まで測る(8・8 km)。

ほかに相津鼻(又島) 520 m、合計9・4 km。

16時頃帰宿。

この夜晴天 ただし前夜測量したため測らず。

宿泊は昨日と同じ。

なお、「伊能忠敬測量日記」は、「伊能忠敬e史料館」

編 『伊能忠敬 測量日記解説』を元にして記載するが、解説文でも読みづらいため、さらに読みやすく若干誤りがあることを覚悟して、筆者責任において、単位や用語等を現代文へ編集し記す。

参考までに「解説文」の原文(10月17日)を掲載する。

【解説文・原文】

九月十九日 朝晴曇。同所逗留。六ツ後出立。同所より初、同村枝下多尾、小宮地村、字潟内、枝北高根、字立、字丸瀬迄測(二里九町三間四尺。渡三十九間)。外に相津鼻(又島) 四町四十五間五尺、合二里十四町二十八間三尺。七ツ頃帰宿。此夜晴天。前夜測量故、不測。

《巡》6時(正六ツ時)出発 晴天 西北風

大多尾村庄屋宅前より測量 海辺通り小宮地内福泊り
辺りで昼食を船の上で摂る。
二本木まで済む。

15時(未刻頃)頃大多尾へ引き取る。(以下時刻の併記は省略)

大多尾から測量を開始した測量隊は、これより南下し、宮野河内、深海、そして久玉へと進む。それにしてもせわしいことで。のんびりした天草人は、そのあわただしさに驚いたかもしれない。

測量隊は、薩摩の測量後天草に来島した。薩摩には、八次でも測量を行っている。というのは、七次で屋久島、種子島を測量したかったが、天気が悪く断念しているためである。

一般的に言われているのは、鎖国の上に鎖国を重ねているのが薩摩藩だ。勿論、前者の鎖国は外国に対してであり、後者の鎖国は日本国の他の国、特に幕府に対してはかなり厳しい門戸制限をしていたといわれている。ただし、伊能測量隊に関しては、ほとんど圧力はなかったようだ。むしろ、他藩よりも協力的だったとも言われている。忠敬が郷里に送った書簡によると、その協力に対して大変感謝をしていると記している。種子島、屋久島の測量に際しては、多人数の測量世話人を出してもらったということだ。

薩摩藩の藩主は十代の斉興であったが、実権は祖父の重

豪が握っていた。重豪は蘭学に非常に興味を示し、藩校を設立し教育の普及に努めた。開明的な藩主であったことが、忠敬の日本地図作成にも大いに共感し、惜しめない協力を与えたものと思える。薩摩の付添役野元嘉三治氏が、宜珍のように付廻り記を残していたら、薩摩測量がより具体的に見えると思うのだが。

さて一国(藩)の測量を終えて、次の領国へ入ったら(一区切りしたら)、ここは1日くらいは休もうか、というのが現在だが、伊能測量隊は、休みも取らず、測量を続行している。現代の我々からすると、かなり過酷な事業・労働をしていたことが分かる。

もともと現代でも、ブラック企業が問題となっており、このような過密労働を強いられていることは、皆無というより結構多いように思え無くもないが。

2日目 10月18日(九月二十日)

測地・小宮地村・中田村(天草市新和町)
泊地・中田村(天草市新和町)

《測》朝晴天

5 時頃六大多尾村出発。

昨日測り止めた小宮地村北高根字丸瀬鼻より始める。
二本木、高根、赤崎、宮池ヶ浦（ここより小宮地本村へ3・3 km）

中田村ツフロゲ浦、木場、彦坊迄測る。（9・3 km、

止め宿打上1・5 km、合計10・8 km）

12 時過ぎ中田村に着く。

本陣・庄屋大堂作右衛門。

別宿・浄土宗西光庵。^{*}

坂部、青木、文助、良助、長蔵、15 時ごろ肥後国より
帰着する。

（宿は同じ）

【坂部支隊】

暁、袋村より乗船。天草郡の内、大多尾村へ着。庄屋
武部利左衛門にて午食し、中田村へ15 時頃に着く。

※西光庵＝崇円寺末庵・現西光寺

《巡》晴天 西南風

①二本木より測量。2 時頃乗船し、二本木に着いた頃は夜明けまでしばらく時間があつたので、柴を焼いて明るくなるのを待つ。磁石がようやく見えるようになった頃に測量を仕掛かる。北高根拜殿にて休憩、松ノ出崎で船の中で昼飯。

14 時ころ中田村新田土手迄済む。それより庄屋宅まで測る。

同村に泊まる。

大矢野大庄屋は今日坂部様が渡海するので大多尾に残る。

②坂部貞兵衛様上下8 人、肥後芦北袋村より大多尾村へ渡海。同村にて昼食。16 時頃中田村へ来る。

③19 日、芦北袋村まで聞き合わせに行っていた宮田村庄屋、上津浦庄屋が夜前大多尾村へ帰る。

④今日出迎えの町山口村庄屋の援船6 艘出る。内3 艘は御所浦より、3 艘湯舟原より出る。

食い違い。

測量日記では、「七ツ半頃大多尾村出立。昨日測留、小宮地村枝北高根字丸瀬鼻より初・・・」。

巡廻日記では「二本木方御測量 今晚丑刻御乗出右二本

木江御着船之處 未夜明暫磯辺ニ柴焼候而御待合 磁石漸々
相見江候頃方御仕懸・・・」と記されている。

国土地理院の地図には、丸瀬鼻という地名は載っていないが、二本木すぐ手前のでっぱり（前地図の二本木鼻）と思われる、測量開始地点は同じとみていい。

しかし、宿からの出発時間は大いに違う。測量日記の七ツ半は、5時頃であり、巡廻日記の丑刻は2時から4時前までに当たる。また、測量開始地点まで、巡廻日記には船で行っているが、測量日記にはそのことを記していない。どちらが正しいのだろうか。

考えるに、どちらも正しいと言えるかも。というのは、まず弟子たちが丑刻に船で出発し、忠敬は七ツ半に船か徒歩あるいは駕籠で出立したとすれば、矛盾はない。

ちなみに、この頃の出は6時頃である。明るくなるのは約30分前とすれば、忠敬が現場へ着いた頃かややその前に弟子たちは測量を開始していたと思える。

坂部支隊も天草へ

これまで、伊能隊と坂部隊に分かれて測量をしていた。

伊能隊は、薩摩の西海岸沿いに測量してきたが、坂部隊は、鹿児島より横切り（ほぼ九州道沿い）で肥後藩領に入り、

人吉、八代、それより南下し水俣方面の測量を行った。

そして、葦北郡袋村（現水俣市）より天草へ渡航。10月18日（九月二十日）に、大多尾村へ着き本隊と合流した。

このように、測量は一隊で行うというより、二隊に分かれて測量した部分が大きく、副隊長の坂部貞兵衛の役割は大きなものがあつた。

3日目 10月19日（九月二十一日）

測地・中田村、（天草市新和町）

立原村、津留村（天草市河浦町）

泊地・中田村（天草市新和町）

《測》 前夜より雨が降る。12時前雨止む。

青木、上田、箱田、長蔵は、宿より始める。立原村大丸、津留村まで測る。

（後日、下田村より横切の半分を測る。4・5km）
17時頃帰る。

宿は前日同。

面会（※この面会者の名前は、忠敬測量日記では二十

一日の分として二十二日の日付に書かれている

中田村組合

平床村庄屋富永勢左衛門

立原村庄屋庄屋本多治郎兵衛

久留村庄屋小林市郎右衛門

宮地岳村庄屋中西亀左衛門

市瀬村庄屋本田嘉助

益田村庄屋蓑田為右衛門

白木河内村庄屋松浦百助

下田村庄屋園田直三郎

この夜晴天、天文測量。

《巡》 暁前より雨 11時ころより晴れ

今朝雨天のため測量は中止になる。

坂部様も御休み。(当然忠敬も休み)

青木様、永井様他内弟子2人は、昼過ぎより測量に出

る。当村より津留村まで道筋を測量する。大矢野(大

庄屋)付添。津留村のうち高札場近辺川端迄測量。

暮れ前に中田村へ帰宿。

晴天のため夜分天文測量。

時刻について

私たちが当たり前に使っている現在の時刻は、1日が24時間を平等に24分割している定時法という方法を使っている。ところが、江戸時代は、1日24時間には変わりないが、1時間の長さは季節により、昼と夜では違っていた。これを不定時法という。厳密に言えば、24節気毎に変えていた。単位時間辺りは、昼間と夜間に分けそれぞれ6等分していた。したがって、昼間の時間と夜間の時間は違う。

昼間とは、夜明けの時間(日の出ではない)から始まり、日暮れで終わる。こう書くことや適当に決められていたようだが、寛政暦では、太陽の中心の仰角が7度21分40秒の時を「明六ツ」「暮六ツ」と規定しており、科学的である。別の表現で言えば、日の出前に星が見えなくなる時を「明六ツ」といい、日が暮れて星がみえる時刻を「暮六ツ」と言った。この時間は、日の出、日の入りの約30分前後である。

現在から見ると、複雑なシステムだが、江戸時代の人にとっては、合理的な方法であった。というのは、当時の照明はとても暗く、夜仕事ができなかったため、明るい時間は仕事をする間、暗い時間は休む・寝る時間と決めていたのである。

テレビや映画の時代劇ドラマでは、夜のシーンも明々としているが、実際はとても暗かった。その暗がりでも、如何に当時の人々の目がいいといっても、仕事が昼間と同じようにできるはずがない。

江戸時代の時刻表示には二種類あった。

一つの方法は、数字で表す方法。明六ツ、朝五ツ、朝四ツ、昼九ツ、昼八ツ、夕七ツ」（以上昼間）と、暮六ツ、宵五ツ、夜四ツ、夜九ツ、夜八ツ（以上夜間）という表記である。この〇ツは現在の言うところ、約2時間である。したがって、これを細かくして、1時間単位に、例えば六ツ半といった、表現もある。

使われている数字と並びは不可解である。四、五、六、七、八、九という数字が使われていて、一、二、三の数字は使われていない。また、使われている数字の並びも不可解。この不可解の理由は、易の考え方に由来しているという。

また子から亥までの十二支を使った表示もある。十二支だから、一単位は2時間。

現在の言えは、イライラするほどの時間単位だが、当時の社会の動きとしては、何ら不自由を感じていなかったということだろう。

余話的に述べると、時代小説等では、「草木も眠る丑三つ時」と表現がよくある。この丑時は、午前2時から3時までの、つまり深夜である。

丑の刻は午前2時を中心とする約2時間。「丑三」（うしみつ）は、丑の刻を4分し、その第3に相当する時、すなわち、午前2時頃から午前2時30分頃までであり、俗に、草木も眠るとか、家の軒が3寸下るとかいい、魔物が跳梁するのにふさわしい時であると考えられた。（Wikipedia）

時間割は大まかだが、意外に30分単位で区切るなど、けっこう細やかでもあったようだ。

時代劇で、よく「いつとき」とか「はんとき」という時間表現が使われている。いつときとは約2時間で、一刻と書き、一時ではない。したがって、半刻は1時間、小半刻（四半刻）は約30分である。

忠敬の日記では前者の時刻表示、宜珍の日記は後者の表示をしている

表記例

《測》

九月十九日 六ツ後出立。

七ツ頃帰宿。

九月二十日 七ツ半頃出立。

九ツ後到着。

《巡》

九ノ廿二日 寅刻方御出立。

御仕舞未刻頃。

寅の刻といっても、季節によって若干違うが、大体4時から6時前迄の幅がある。したがって、宜珍の時刻には2時間くらい幅があるわけで、それを現在の、シビアに時間表記をすることは不可能だ。でも、当時はその幅のある時間単位で、十分であり、それを現代表記の時間を表すことは、無意味でもある。そのことを加味して読み取り頂きたい。

日の出、日の入りは東西で違う。例えば江戸と熊本では、30分から40分ほどの違いがある。ということは、江戸と熊本の夜明けと日暮れも違うわけで、江戸の時刻（標準時）を使うと、やや違いがあるので、その違いを加味して、熊本地方での時間を計算してみた。また、当然季節によっても違うので、ここは、伊能忠敬が天草測量をした10月16日から12月7日迄のほぼ中間で計算した。データは、『理科年表 平成21年』丸善株式会社を使った。

なお、この計算は目安であり、この時間が使われていた

のではない。（巻末資料参照）

さて、江戸のような都会では、時刻を知らせる鐘が鳴らされ、人々は時刻を知ることが出来たということだが、天草のような僻地では、人々は時刻を知る術がなかったと思う。明け六ツと暮れ六ツ、正午は大体分かるので、それを基準にして、時刻を判断していたのではなからうか。それは、伊能忠敬でも同じで、例えば、「六ツ半頃」と言うように時刻を表している。現在のように、1分も狂いないという電車の発着時間こそ、ある意味異常かもしれない。それでも、事をなす時などには、時刻を知る必要もあったよううで、天草近代年譜には、次のようなことが記されている。

寛政十一年（1799）

この年、高浜村、福連木村、都呂々村三ヶ村中申し合わせ、百姓稼ぎ方の時刻知らせ、且つ唐船御用の人足集めに、太鼓を打ち鳴らしたいことを願い出て、役所聞き済みとなる。

距離表示について

距離は当然尺貫法で記されている。しかしこれをそのま

ま記しても、現代人の我々はその距離を実感できない。そこで、メートル法に換算して表示した。

なお、原書では次のように記されている。

《測》九月十九日 字丸瀬迄測（二里九町三間四尺。）

これを換算して、本書ではこれを換算して「8・8 km」と表記した。ただし、これを正確に換算すると、8843・01 mである。我々はこの忠敬が測量した距離で地図を作るのではないので、おおよそで表記しても特に差し支えないだろう。

長さ・度量換算表

尺	間	町	里	メートル
1	0.17	－	－	0.30
6	1	0.02	－	1.82
360	60	1	0.03	109.09
12960	2160	36	1	3927.27
3.3	0.55	－	－	1

少数点3位で四捨五入 ーは微小のため略